

越境の中に映し出される自画像 ——マレーシア映画文化研究会活動報告——

篠崎香織

近年の映画の多くは、とりわけ商業映画は、世界を市場とするハリウッド映画など一部を除いて、ある特定の社会で最大公約数的に求められる世界観や価値観、嗜好を市場とし、国別に発展してきた側面がある。他方で映画は、映像を通じて表現するため、国境や言語の壁を越えやすいメディアでもある。主題や手法が越境して相互に参照される中で、また人材が越境して行き交う中で、映画は発展してきた。実際、1930年代から1960年代にかけてシンガポールを含むマラヤ地域が「映画の都」となったのも、映画の越境性に拠るところが大きかった。

こうした遺産を受け継ぐようにして、今日のシンガポールやマレーシアでは、物語の主題に越境性を取り入れて作品を制作したり、越境的な制作現場で作品を制作したりする「混成アジア映画」が作られ、国際映画祭などで世界的な評価を受けつつある。こうした状況に注目して、マレーシア映画文化研究会では2つのシンポジウムを実施した。

「境界を越えて撮られる日本と日本人——短編映画に見る3人のグローバル映像作家の世界」

2013年9月6日に京都大学芝蘭会館山内ホールで実施されたこのシンポジウム(主催:京都大学地域研究統合情報センター、共催:京都大学地域研究統合情報センター共同利用共同研究プロジェクト「映画に見る現代アジア社会の課題」、マレーシア映画文化研究会)では、日本を拠点に映像制作活動を行っている3人のグローバル映像作家を迎

え、さまざまな「越境」の現場で生まれつつある新しい想像力や世界像の可能性を考えることを目的とした。当日は短編作品の参考上映があり、それを踏まえたディスカッションが行われた。

1 人目の登壇者は、リム・カーワイ(Lim Kah Wai)監督であった。リム監督はクアラルンプール出身のマレーシア人で、大阪大学を卒業し、日本でエンジニアとして勤めた後、北京電影学院や台湾の侯孝賢監督のもとで演出を学び、2009年に『アフター・オール・ディーズ・イヤーズ』で長編デビューした。その後は、日本や韓国などアジアの映画人との協働のもとで、『マジック&ロス』(2010年)、大阪・新世界を舞台とした『新世界の夜明け』(2010年)を監督した。2013年12月には大阪・ミナミを舞台とする新作『Fly Me to Minami～恋するミナミ』(2013年)が劇場公開される。

参考上映1本目は、『トライブ(Tribe/家≠族)』(2005年)であった。中国らしきどこかの都市のアパートで暮らす若い男の元に、若い女と中年の女が現れ、3人の共同生活が始まり、そして別れるという作品である。登場人物の関係について何の説明もなく、場の共有が関係性を発生させていることがただ描かれる。こうした関係性のあり方に、関係性がある場が設定されるというよりは、場が設定された中で関係性が構築されるという東南アジアの歴史と大きく重なるようにも思えた。

参考上映2本目は、ブラジル・サンパウロの東洋人の街リベルダーヂをとらえたドキュメンタリー

『Still Life in Mobile Town』であった。東洋系の文化(日本製アニメ、相撲、カンフー、龍舞い、中国仏教など)の実践に携わる非東洋系のブラジル人を映す本作品には、発祥地を離れて独自に発展した文化も「オリジナル」だとするメッセージが込められているように感じられた。これは、混成社会の中で折り合いをつけながら生きる中で、自らが実践する文明が「オリジナル」から逸脱していることを自覚しているマレーシアの人たちに向けられたメッセージでもあるように思われた。

リム監督は、マレーシアにいた頃は華人としてのこだわりが強く、日本に来たことでこだわりから解放されたと言った。リム監督にとって越境や日本とは、自らをこだわりから解き放ち、自らをとらえていたものを普遍的に描きうる場であるように思われた。

2 人目の登壇者は、エドモンド・ヨウ(Edmund Yeo)監督であった。ヨウ監督はシンガポール生まれのマレーシア人で、オーストラリアと日本の早稲田大学安藤紘平研究室で映画を学び、現在は日本とマレーシアを拠点に制作活動を行っている。

ヨウ監督は高校生の時から日本のドラマに親しみ、日本文化を自らの一部と感じてきたという。参考上映1本目の『金魚(Kingyo)』(2009年)は、川端康成作品に感じた日本の美しさを現代日本に置き換え(主人公の女性が秋葉原のメイド姿なのは「踊り子」の改編であるという)、幽玄さを水中を漂う金魚の描写で表現している。2 本目の『避けられる事(Exhalation)』(2010年)は、同級生を事故で亡くした自らの経験に基づき、モノクロとカラーを織り交ぜた幻想的な映像の中に、木々やせせらぎなど日本の風景美や、死をめぐる日本的な表象美を

取り入れた作品である。3 本目の『冬の断片(Last Fragments of Winter)』(2011年)は、金井美恵子『単語集』に着想を得た作品で、雪の白川郷の美しさと、マレーシアの田園風景の美しさが混在する中で、この世とあの世との境界線があいまいな幻想的な世界観を生み出している。

ヨウ監督の作品には、記憶や感情のズレを映像技法で表現し、人との距離感や孤独、寂しさ、虚無感などの情感を美しく描くものが多い。しかし自身の作品に対してマレーシアでは、「理解できない」「退屈だ」と言われることが多く、母親にも「マレーシア人がわからない映画をなぜ作るのか?」と言われたと明かした。これに対して日本の文芸作品や日本の観客とは、こうした情感を共有できるように感じているという。ヨウ監督にとって越境や日本という場は、自身が追求する情感やその美しさを共有し、表現しうる機会がより大きい場であるように感じた。

3 人目の登壇者アンドリヤナ・ツヴェトコビッチ(Andrijana Cvetkovik)氏はマケドニア出身の研究者・映像作家である。アジア映画の中の日本人の表象を研究する一方で、日本を題材とした映像作品を手掛ける。今年度は京都大学地域研究統合情報センターに客員教員として所属している。

参考上映1本目の『Time of the Wave』(2009年)は、病に冒されていることを知った男が生に向き合い、無常の中に希望を見出すストーリーである。2本目『Purple and Gold』(2012年)は、ツヴェトコビッチ氏が脚本を担当した作品で、日本国内外の若手映画人を京都の東映・松竹の撮影所に集めて短編時代劇を制作する京都映画若手才能育成ラボを通じて、台湾人監督と日本人スタッフ・キャスト

との協働のもとで制作された。3 本目『Kyoto Mon Amour』(2012 年)は、自身が京都を題材に書いた短歌と京都の風景を組み合わせた作品である。これらの作品は、出自において文化的他者であった者が、その文化をどこまで体現しようかという実験であり、挑戦であるように感じられた。

越境や日本との関わりは、関わり方こそ三者三様であるが、制作活動の源となっている。あるいは、越境して作品を作ることの行為の中に、自らのアイデンティティと向き合う契機があるという指摘もあった。「混成アジア映画」は、制作者がこれまで自覚することがなかった自己に出会い、観客がこれまで知らなかった地域の姿に出会う、作り手も受け手も新たな世界像に出会える場であるように思われた。

「シンガポールドリームは誰のもの？——グローバル・ハブシティが模索するアイデンティティ」

アジアフォーカス・福岡国際映画祭の協力のもと、2013 年 9 月 17 日にキャナルシティ博多で実施した本シンポジウムでは、多様な人が交差するシンガポールならではのユーモアあふれたラブコメディ『スター誕生 (Already Famous/一泡而紅)』(ミシェル・チョン監督、2011 年)を題材に、今日のシンガポールのアイデンティティに迫った。

『スター誕生』は、マレーシア・ジョホール州ヨンピン出身の女の子・アキャオがシンガポールの芸能界に憧れ、スターを目指して上京するところから物語が始まる。アキャオは、英語が下手で、華語がマレーシア訛りで、ファッションセンスがダサイなどと冷遇されてもひたむきに頑張り、周囲の励ましを得ていくというある種の「成功物語」である。本作品に

はシンガポールの多言語・多文化的状況が描かれているだけでなく、欧米、フィリピン、中国、台湾、マレーシアなど様々な地域から夢を抱えてシンガポールにやってきた人たちの交差が描かれ、そこに独特のユーモアが差し挟まれる。

このユーモアを解するために、2 人の話題提供者に話題を提供いただいたうえで、映画祭で来日していた『スター誕生』のプロデューサーであるポーリン・ユイ (Pauline Yu) 氏にお話を伺った。

話題提供者の 1 人目は田村慶子会員 (北九州市立大学) であった。「シンガポールで働く外国人」というタイトルの下、シンガポールが国内の人材開発に力を入れつつ、国外からも広く人材を受け入れた結果、グローバル・ハブシティとして発展を遂げた足跡が紹介された。発展はシンガポール人の自信となった一方で、外国人とのせめぎ合いを生じさせ、新たな課題を生み出しているという。

例えば 2011 年総選挙では、外国人受け入れ政策が争点の一つとなった。また、シンガポール国籍を取得したばかりの中国出身者が「となりのインド人宅のカレーが臭い」とクレームしたことに対し、多文化主義を尊重せよとの抗議・反発が「カレーの日」(2011 年 8 月 21 日)に発展した。この日、中華風、マレー風、インド風など各家庭のカレーが交換され食されたという。さらに、シンガポール人とマレーシア人は互いに「自分たちが上」と認識していることが紹介された。シンガポール人はマレーシア人を「田舎者」と見なし、マレーシア人はシンガポール人を「冷たい」、「拝金主義者」と見なししているという。

話題提供者 2 人目は及川茜氏 (神田外語大学) であった。「ヨンピンからシンガポールへ——カンポ

ン・ガールの上京物語」というタイトルで、中華世界におけるシンガポール華人の自己認識に迫った。

アキャオが憧れるシンガポールの芸能界は、英語ではなく華語が共通語となっている世界であった。しかしアキャオの華語には「マレーシア訛り」があるとして、まともに扱ってもらえなかった。これに関して及川氏は、華語文芸界を目指すマレーシア人は実際には台湾や香港を目指すことが多く、シンガポール人にも台湾で成功することによりキャリアを築く人が多いと指摘した。このことは、アキャオに好意を寄せるコーヒーショップの男の子が台湾人だとわかった時にアキャオが「台湾人は芸能人でない」というセリフにも示されていると述べた。及川氏は明確には述べなかったが、本作品には中華文化の実践においてシンガポールはマレーシアに対して優越感を持つ一方で、台湾に対してはそこまで自信を持ってはいないことが透けて見えるように思われた。また及川氏は、シンガポールで「成功」するには何か秀でていなければならないというシビアな視点が示されているとした。そのうえで、映画は「シンガポールドリーム」の物語で終るかのように見えるが、才能を持つ人がシンガポールを選択するか否かはその人に委ねられていると解釈しうる結末となっているとした。このことは、夢を叶える場としてシンガポール人がシンガポールを全面的に肯定しているわけではないという見方ができると論じた。

ポーリン・ユイ氏は、テレビ番組・映画製作プロデューサーである。シンガポールのテレビ局 Media Corp Channel 8などで放送されたテレビドラマの制作で、プロデューサーなどを務めた。ユイ氏がテレビ・映画業界に入ったのは1990年代初め

で、当時は国内で制作される映画がまだほとんどなかった時代であった。それでもユイ氏は、国際的な言語であり、越境するメディアである映画の可能性を信じて、映画にかかわり続けようとしたという。そうしたなかで2009年に長編映画『The Blue Mansion』(副プロデューサー、2009年)を手がけ、続いて『スター誕生』(プロデューサー)を制作した。ミシェル・チョン監督と再び組んだ新作『3 Peas in a Pod/他她他』(プロデューサー)は、卒業旅行でオーストラリアを旅する韓国、台湾、シンガポールの大学生を主人公とした青春ドラマで、2013年11月に公開された。

チョン監督は、シンガポールではコメディ女優として有名で、特に彼女が出演した『Noose』というテレビ番組が人気だという。同番組でチョン監督は、いかにもいそうな人をデフォルメして演じる。アメリカ英語を話すことを鼻にかけたり、「キアス(負けず嫌い)」であったり、成金的であったりするシンガポール人に加え、フィリピン人や中国人、マレーシア人などを演じる。デフォルメの仕方に、つい笑わされる。これがどこまで「ユーモア」として受け取られうるか疑問ではあるが、シンガポールの人たちの世界観を示しているようで興味深く、本作と合わせて注目したい。



ポーリン・ユイ氏とシンポジウム「シンガポールドリームは誰のもの？」登壇者ら(2013年9月17日)